※「**はらまち九条の会**」は、超党派の自由な市民のゆるやかな会で、匿名でもOKです。
年会費千円。現在の会員４１４名に。会員を募集中ですが、あなたもどうぞご入会を！

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.142

２０１０（平成２２）年 ８月１４日（土）発行

＜昭和20年8月14日正午から翌15日正午の玉音放送（終戦）までは『日本のいちばん長い日』＞

●『日本のいちばん長い日』は大宅壮一原作のドキュメンタリーで、1967年には岡本喜八監督で映画化されました。８月１４日、ポツダム宣言の「聖断」から和平を進める鈴木貫太郎首相らと、徹底抗戦で蹶起しようとする青年将校や、玉音放送を阻止しようと陸軍の一部軍人が皇居に乱入する動乱の15日正午までの２４時間を描いています。

終戦記念日特集その①

０８月１５日の終戦記念日への思いを募集したところ、さまざまなご寄稿がありました。０郡山市の荒さんからは、「7、８年前に孫娘に戦争体験を聞かれて、まとめたものです」と、つらかった学童疎開と戦後の苦しい体験が寄せられました。

私の戦争体験 41

０おじいちゃんが孫娘にお話する戦争のこと０

戦争は私の生活を大きく変えました

郡山市山崎　荒　重富（しげとも）茂

〈おじいちゃんから孫娘へ〉

おじいちゃんの家の洋間に、一枚の風景画があります。おむすびの形をした山で、「塩手山（しおでやま）」と呼んでいます。

昭和十九年、小学四年生の夏 東京からひとりで相馬に疎開

一九四四年、太平洋戦争が終わる前年、国民学校（小学校）四年の夏休みの時、その山の麓の親戚の家に縁故で学童疎開して来たことが、戦争体験のはじまりでした。

▲**相馬市の西の「塩手山」。昭和19年、荒さんは、東京の親元から離れひとりで、この塩手山の麓の親戚の農家に疎開しました。（絵は、鹿島区の朝倉悠三さんに、当時のイメージで描いていただきました）**

電灯もなくランプでの生活

東京の学校からたったひとりで、相馬の山村の学校へ転校してきました。このあたりはまだ電灯が引かれていなかったので、夕方になると灯油を燃やすランプの生活で、夜は一寸先も見えない闇夜でした。純粋の稲作農家なので、秋の稲刈り時には学校は農繁休業となり、農作業の手伝いをしました。朝夕は農耕用の馬を飼っていたので、飼い葉（馬の飼料）が大切な役目でした。冬休みの宿題は勉強より、縄づくりが課せられました。

親元を遠く離れて 勉強よりも農作業の手伝い

親元を遠く離れての、東京では想像もつかない生活ばかりで、珍しいやら、辛いやら、淋しいやらといろいろあって、今の小学生には言葉では説明できない経験ばかりでした。

それでも、おじいちゃんはまだ親戚の家に預けられ、身内の人々がいたので幸せでした。集団疎開といって、学校ごとにまとまって知らない土地へ疎開した生徒たちは食べるものは満足になく、空腹を我慢して、毎日毎日東京の空を仰いで母恋しく、悲しく、泣いてばかりいたそうです。

緑いっぱいの山々 蝉時雨 透き通った川……

おじいちゃんにとっては、東京では見られない、緑いっぱいの山々や、透き通って川底までみえるきれいな川、野鳥の鳴き声、夏の蝉時雨はとても東京では経験できない、いつまでも忘れることのできない記憶となって、頭に残っています。

（裏面につづく）

（表のページから）

「自分のことは自分でやる」

それから、親元から離れて生活しなければならないので、朝起きて夜寝るまで、自分の身の周りのことは自分でしなければなりません。どんなに辛くとも、自分のことは自分でするという人間が生きてゆく上で、最も大切な基本的な生活習慣が身についたようです。

おじいちゃんは、一九四五年三月九、十日の東京大空襲の時は、幸い東京にいなかったので、B29の空襲の体験は全くありません。父親とか身内の人が出征して、戦死したとかの不幸も経験しませんでした。

より苦しかった戦後の生活

またおじいちゃんにとっては、戦争中の体験よりも終戦後の体験の方が、深刻な苦しい体験でした。

一九四五（昭和二十）年八月十五日は、終戦の日です。学校が始まっても、教科書がない。先生もいない。学校へ行っても満足な授業はできません。教科書は先輩から譲ってもらうのですがおじいちゃんには知り合いもいないので、放課後担任の先生の教科書を借りて、それを写して勉強をしました。

毎日の生活はもっと深刻です。朝起きると何を食べられるのか、食べることしか考えません。隣り近所の人から余った食べ物をもらって口にしたこともあります。人からものをもらうことの悲しさ、辛さを十分に知ることができました。

人一倍勉強しようと決心

その後、人からものをもらうのではなく、人に与える立場になれないものかと考え、そのためにはどうしたらよいのかと思案したこともありました。お金がなくともできることは何かと、あの頃考えました。その方策のひとつが、他人より数倍努力して勉強することだ、と思うようになりました。

終戦後の苦しい生活の中で、唯一得られたプラスになったものはと聞かれれば、「ものがなくとも他人より勉強しようと決意したことだ」と今、回想しています。

そのおかげで、その後大学まで進学して高校教師になれたのではないかと、感謝するようになりました。

いつも風景画の塩手山を見ながら、昔々の太平洋戦争の頃を走馬燈のように思い出しています。

○荒重富茂（あらしげとも）さんは1934年生まれで今年76歳です。元県高校社会科教諭。平成４年４月から７年３月まで母校の県立相馬高等学校第３３代校長を務められ、ご退職されました。○「大した体験ではないから匿名にして」と話されていましたが、事務局で了解を求め、公表させていただきました。

テレビ 戦争特番から・・

今年の８月も戦争特集のテレビ番組がたくさん放映されました。皆さんは如何だったでしょう。印象的な言葉をメモしてみました。

○8月6日広島平和記念式典で、どうしてNHKは、国連事務総長潘基文（バンギムン）氏のせっかくのあいさつが始まる時に、人気ドラマ『ゲゲゲの女房』に切り替えてしまって放送しなかったのか、本当に残念でした。

○『女優である前に人間として原爆詩の朗読を続けている。戦後は平和の代名詞です。反戦と核廃絶を強く訴えたい』吉永小百合（8/6NHK「吉永小百合・被爆65年の広島・長崎」）

「幻の甲子園」から

○太平洋戦争中に1回だけ、1942（昭和17）年に開かれた甲子園大会。すべてが戦争一色で、スコアボードには「戦ひ抜かう大東亜戦」と掲げられ、試合開始は「進軍ラッパ」、軍人精神で選手交代は認められなかった。スポーツも国策に利用する軍や文部省の命令の大会で、正式記録もない。平和だからこそスポーツ大会も開催される。（8/7NHK「幻の甲子園」）

○『ラバウルで私だけひとり生き残ったら、「みんな死んだんだから、お前も死ね」と上官たちが命令した。そんな馬鹿な話はない』水木しげる（8/13NHK「証言記録・兵士たちの戦争、生き残ってはいけない」）

○『学校で戦争のことを教えてくれなかっただなんて（若い人は）言っているけど、戦争のことを知ろうとすればいくらでも自分で勉強できるんじゃないですか』神谷　繁（8/12NHK「爆笑問題の戦争入門」）

○『戦後65年、日本はあの敗戦から立ち直り、世界有数の豊かな国家として成功したんじゃなかったのか』『俺たちは今のような空しい日本を作るためにあの戦いで死んだつもりはない』（8/14TBSドラム「歸國」）

○『学校はうちの子を志願させ、死ねというのですか』『うちの子は大君（天皇）の子ではない。私の子です』『僕たちは学校で死ねと教わった。学問がなかったのは国の方です』（8/15NHKドラマ「１５歳の志願兵」）

○ NHK『擬装病院船』『囮（おとり）とされた空母瑞鶴』などの番組をみても、たくさんの部下を死に追いやっても自分の保身のために責任転嫁する指揮官たちのずるい姿、それが軍隊や為政者の本質です。６５年後の現代でも同じで、イラク戦争を始めたブッシュ大統領や、支持したブレアや小泉純一郎首相などの無責任と重なります。

○今夏のテレビや新聞などで『戦争中、私は加害者だった』という正直な証言が初めて出てきた、と言われています。